



基本理念 この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である



院長 福治 康秀

新年あけましておめでとうございます。

旧年中は、あらゆるところでお世話になりました。ありがとうございました。

昨年は、地域包括ケア病棟の立ち上げを行いました。丁寧な対応で、地域移行をしつかりと進める病棟です。今後も、しっかりと地域移行を進め、患者さんが地域で生き生きと生活できることを支援できる病院であり続けます。

また、rTMS(反復経頭蓋磁気刺激療法)を引き続き継続しております。rTMSは中等度うつ病で1剤以上の抗うつ薬を使用した効果が不十分な方に適応があります。当院では、計7例の治療を行いました皆さん著効しました。今後も、この治療法を沖縄県の必要としている患者さんにしっかりと届けます。よろしくお願いします。

昨年は、全国の国立病院機構における若手精神科医の研修・研究発表の場である、NHO精神科レジデントフォーラムの主催をしました。皆さん、素晴らしい発表をされておりまた、活発な交流もされておりまた、若手精神科の成長の場として貢献できました。

12月には電子カルテを導入しました。慣れるまでの間は、しばらく皆さんにご迷惑をおかけすることになりますが、どうぞご容赦ください。

さて、今年の干支は、丙午(ひのえうま)です。午(うま)年にあたるこの年は、情熱や変化を象徴する年とされ、午年生まれの性格や丙午にまつわる迷信なども注目されています。丙(ひのえ)は、十干の3番目で「火」の要素を持ち、太陽や明るさ、生命のエネルギーを表すとされています。また午は、古くから人間とともに生きてきた動物。駿足を持ち、独立心が強く、また人を助けてくれる存在でもあります。そのため丙午の年は、「勢いとエネルギーに満ちて、活動的になる」年になると考えられます。ただ、「丙午の年に生まれた女の子は気性が激しく夫が苦労する」という迷信があることから、昔は丙午の年に子どもを産むことを避けたり、丙午の年に生まれたことを隠したりといったことが一部で行われていました。もともと中国から十干十二支が伝わった中で、丙午の年と丁巳の年には天災が多いとされたこと、また江戸時代に「八百屋のお七」という娘が恋人に会うために放火をして火刑に処されたという話が広く伝わり、お七が丙午生まれであったことに由来するこのされ、実際に前回の丙午の年(1966年)には前後の年に比べて出生率が低いなどの影響がありました。とはいえ、こうした言い伝えはあくまでも時代背景とともに生まれた迷信だそうです。

2026年は、火の力が重なることで情熱や勢いが高まり、太陽のようにエネルギーが満ち溢れる年となります。大きな飛躍のチャンスですので、新しいことや諦めかけていたことに挑戦すると良い結果に繋がる年になるとのことです。今年は、皆さんにとって大きな飛躍の年になることでしょう。当院も、地域のニーズをしっかりと拾い上げ、ニーズに応じた医療・サービスの提供を進め、さらなる大きな飛躍を目指します。そのためにも、各関連機関との協力・連携がさらに重要となります。

今年も、どうぞよろしくお願いいたします。

● 地域連携室だより

精神保健福祉士 伊禮 有香里

琉球病院では、受診相談や地域、行政、他医療機関からの窓口として地域医療連携室を設置しております。一般精神をはじめ、アルコール依存症を含むアディクション全般、治療抵抗性統合失調症治療薬で効果のあるクロザピンによる治療、うつ病への治療として反復経頭蓋磁気刺激療法(rTMS)、認知症、児童思春期外来といった様々な疾患をお受けできる診療体制を整えております。また、中北部圏域を中心とした地域の皆様によりよい医療を提供し、適切な対応ができるよう心がけております。初診はじめ、受診については予約制となっておりますが、入院治療のご相談など迅速に対応できるよう心掛けてまいりますので、お気軽に地域医療連携室までお問い合わせください。

院長



ふくじ やすひで
福治 康秀

1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。
1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。
95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。
日本森田療法学会理事。
日本病院・地域精神医学会理事。
琉球大学医学部 臨床教授。

診療科

- ・一般精神科
- ・こども心療科
- ・クロザリル外来
- ・アルコール依存症等外来

病床数

353床

- ・精神 151床
(一般精神・クロザピン専門・精神科救急)
- ・アルコール依存症 44床
- ・児童思春期ユニット 4床
- ・重症心身障がい 90床
- ・医療観察法 37床



路線バス 那覇BS(下り)または名護BS(上り)より
沖縄バス「77 番名護線」浜田バス停
下車徒歩3分

自動車 那覇市から40分沖縄自動車道金武
インターから名護向け5分

お問い合わせ

時間 8:30 ~ 17:15
(土・日・祝日・年末年始以外)
TEL 098-968-2133(代)
内線 231・234

地域医療連携室(直通)

TEL 098-968-3550
FAX 098-968-7370

治療抵抗性精神疾患への医療

精神科医長 木田 直也



クロザピンの治療状況

治療抵抗性統合失調症の患者さんに対して、当院では2010年からクロザピン(CLZ)治療を開始し、登録症例数は延べ446例になりました。2025年11月のCLZ登録症例は1例でした。CLZ導入前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために、隔離や身体拘束が必要な患者さんも多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動が消失、もしくは軽減し、ほとんどの症例で隔離や身体拘束は解除できています。週に3回のCLZ専門外来も行っていますので、患者さんのご紹介をお願い致します。当院でのCLZ治療や沖縄県での地域連携の実際については、ノバルティスファーマ社の医療関係者向けサイトのクロザリル/クロザリル適正使用の流れ(<https://www.drs-net.novartis.co.jp/dr/products/product/clozaril/point/>)でも動画が公開されていますので、ご参照ください。

重症心身障がい児(者)病棟のご紹介

西Ⅱ病棟師長 玉城 由美恵

西Ⅱ病棟は、45床の重症心身障がい者病棟であり、経管栄養など身体管理が必要な利用者のほか、強度行動障がいのある利用者も一緒に生活されています。今年度は強度行動障がいのある利用者3名が入所されました。新規の利用者を受け入れることで、カンファレンスや病棟相談会だけではなく、強度行動障がいの看護について、より専門的知識や技術を習得し看護の質を高めるため、西Ⅰ病棟への交流研修を行いました。今後も、利用者一人ひとりの個性や機能を活かせるよう多職種で連携しながら、治療、看護、身体リハビリテーション、摂食嚥下療法、療育などをおこなっていききたいと思います。

医療観察法病棟のご紹介

西Ⅲ病棟師長 竹島 銀治

当病棟は医療観察法の指定入院医療機関として運営しています。医療観察法は、心神喪失または心神耗弱の状態で重大な他害行為を行った者が裁判所の命令で入院し、病状の改善と同様な他害行為の再発防止、社会復帰を促進することを目的に入院治療する病棟です。治療には、医師・看護師・公認心理士・作業療法士・精神保健福祉士などの多職種でチーム医療を展開し専門性の高い治療を行っています。今年、開棟18年目が経過し、以前は県外の方も多く入院されていましたが、全国的にも医療観察法病棟が設備され、現在は県内の方を中心受け入れています。季節の行事プログラムを取り入れ、関連機関、地域支援者と連携し、社会復帰を促進しています。

令和7年度沖縄県DPAT初任者研修会

心理療法士(日本DPAT・業務調整員) 諸見 秀太

昨年の11月28日に、沖縄県DPAT初任者研修会が開催されました。県内の精神科医療機関ならびに精神保健福祉センター等の行政機関の合わせて14機関が参加されていました。当院からは講師・ファシリテーターや研修参加者として看護師・業務調整員(心理療法士)の計5名が参加しました。研修では、災害医療の概論に始まり、DPATとしての派遣に関すること、自院が被災したときの院内本部の立ち上げや減災への取り組み等、基本的なことからすぐにでも活かせる内容でした。減災への取り組みに関しては、“自院の設備、業務について再確認する”ことを目的とし、被災時にいかに業務仕分けを行い、限られた資源と職員で医療活動・支援が行えるよう平時から検討しておくことが大事との話がありました。これはBCP(事業継続計画)マニュアルの策定や災害時に医療提供できる体制を作っていくことにつながるものと感じました。また、演習では、災害時記録の実践やEIMS(広域災害救急医療情報システム)操作、大規模災害を想定しての院内本部立ち上げに取り組み、実践的な内容となっていました。県内でも令和6年度北部豪雨災害や北部地域における水道管漏水に伴う断水など、災害対応を行う機会が出てきています。今一度、平時における備えの意識のもと、医療機関・施設単位にとどまらず、個々人の災害時対応について、再確認・再検討することも良いかと思います。当院も、災害拠点精神科病院としての役割が遂行できるよう、院内訓練を始め、防災・減災・BCPの視点をもって備えを進めていきたいと思っています。

琉星保育園の園児たちがハロウィンで訪問致しました

入院係 甲斐 伊織

10月31日に当院内にある琉星保育園の園児たちがにちなんだ可愛い仮装をして院内を訪問致しました。色とりどりの衣装に身を包んだ子供たちの姿に職員一同とても癒やされ、院内が一気に明るく楽しい雰囲気になりました。訪問の際には、事務・医局・看護部スタッフからお菓子のプレゼントを行い、園児たちは笑顔いっぱい「ありがとうございます!」と元気にお礼をしてくれました。普段の業務ではなかなか味わえない心温まる交流のひとつとなり、職員同士の会話も弾みました。こうした取り組みを通じて、院内の絆を深め、温かい院内づくりを目指してまいります。

